京三中・山城高同窓会　会誌

双ヶ丘

第11号　2017年3月1日

表紙について

今号の表紙を飾ったのは、京三中36回卒・川那部昭さんが制作された木版画「美山」です。もとは寄稿文に添える挿画として寄せられたものだったのですが、精細な多色刷りの美しさに編集担当者が感銘を受け、小さな扱いではもったいないと思い、ご本人の承諾を得て、表紙に採り上げさせていただきました。制作に至る過程などは、本文中に詳しく述べられていますので、ご覧ください。

巻頭言

刊行によせて

京三中・山城高同窓会
会長　森　貞男

このたび、京三中・山城高同窓会の事業の一環として、多くの同窓生のご協力により、会誌「双ヶ丘」第11号が刊行されました。

より多くの同窓生の方々に「双ヶ丘」を知ってもらえるよう、今後ともご協力いただけますようお願いします。

京都第三中学校　校歌

一、朝に仰ぐ秋嶺愛宕
夕べに掬ぶ清流桂
山河自然の霊気を享けて
集ふ双陵健児一千
おお三中その名ぞ　われらが誇り

二、誠実天の聖火とかかげ
剛健地の威徳とたたへ
崇文尚武ただ一筋に
競ふ姿の雄々しさ見よや
おお三中その名ぞ　われらがまもり

三、進取不断の光と恃み
協同不壊の翼と張りて
若き生命の日に新しく
理想の空行く羽音を聞けや
おお三中その名ぞ　われらがちから

四、歴史はにほふ古き都に
繚乱誇る桜のしるし
護りてとはに祖国のさちを
拓かんわれらが大なる使命
おお三中その名ぞ　われらがいのち

京都府立山城高等学校　校歌

一、双ヶ丘に鐘なりて
流れさやけき桂川
御室のさくら咲き匂う
学びの家のたふとさよ
正義真実責任の
命みなぎるわれら山城

二、愛宕の峰に雲晴れて
ひかげさしそふ西の京
嵯峨野をわたる風清き
学びの園のめでたさよ
平和　協力　友愛の
光あまねきわれら山城

「チーム山城」

校長　前島　巌

同窓会の皆様には、日頃より本校の教育に御理解・御支援をいただき、心より感謝申し上げます。

平成26年度に京都市・乙訓地域が1つの通学圏となって本年度で3年になり、全学年が新しい高校制度下で入学してきたことになります。本校では、このような高校制度の改革に対応するため、早期から本校の教育ビジョンを整理し、「グローバル社会で活躍できる力を育み、将来、様々な分野で社会に貢献する人間を育成する」ことを学校の使命と捉えて学校教育を推進してきました。また、平成19年度に設置した文理総合科は、今年度で10年となりました。普通科は、平成26年度から、スタンダード、アドバンスト、スーパーアドバンストの3コースを設置し、学校全体で教育改革を進めています。

施設設備の面でも改良を施しており、昨年度から整備を進めていた中庭のウッドデッキは、総檜貼りの「檜舞台」を連想させる立派なものに生まれ変わりました。将来、山城高校の卒業生がそれぞれの人生の「檜舞台」で活躍してくれることを願うばかりです。また、学校の正門横には、同窓会の皆様の支援を得て、英語の校名表示板を設置させていただくことができました。心より感謝申し上げます。この校名表示板は、これまでの本校の大きな教育改革の節目を象徴しているようで、「画竜点睛」を得た思いがします。

現在、世界はグローバル化の時代に突入しています。様々な情報が瞬時に世界を駆け巡り、便利さや物質的な豊かさが広がる一方で、環境や経済、テロなどに関する課題もグローバルな規模で拡散しています。また、日本においては、少子高齢化が進み、これまでだれも経験したことがないような人口減少の時代を迎えようとしています。このような時代を生き抜いていくためには、社会の現実の光と影を直視し、光の部分を大切に育てながら、影の部分が広がって暗闇とならないように考え、判断・行動する力が必要になります。生徒達は、将来、社会のどの分野に進んでも、それぞれの分野における課題を認識して解決していく立場に立つことになります。その時に必要な判断力や行動力は、この多感な高校時代に経験する様々な実体験を通じて大きく育まれます。例えば、事象の表層から深層までを多面的に観て課題を認識するという経験。その課題解決の道筋を多角的に考えるという経験。そして、人々と協力・協働しながら実際の解決に向けてチャレンジしていくという経験。このような経験は、自由な発想や失敗が許される学生時代だからこそできることです。本校では、どの生徒にもハイレベルな文武両道にチャレンジして「人間力」を大いに鍛えてほしいと考えています。

文武両道の「文」においては、文系と理系の学びを併せもった

教育を通じてリベラルアーツの精神を育み、批判的思考力や判断力、行動力の伸長をめざしています。現在、本校では「山城高校アカデミックプロジェクト」として4分野の教育実践プログラムを組み、特色ある教育に取り組んでいます。「サイエンス」の分野では、日本の大学で研究している海外の研究者を招いて英語で講義をしてもらったり、高大連携による実験授業やフィールドワークを体験したりしています。「人間探究」の分野では、同窓会の御協力を得て、「第31回山城高校21世紀塾」を開催させていただくことができました。また、「連歌」を通じて日本文化の心を体験的に学んだりしています。「学習スキルプログラム」では、タブレットの利活用により、新たな学びの可能性を追求しています。

「グローバル」の分野では、今年も京都府教育委員会の研究指定を受け、「グローバルネットワーク京都」の論文コンテストや、ポスターセッション、プレゼンテーションに参加しています。また、国際交流の一環として毎年AFSの交換留学生を受け入れており、ベルギー留学生の帰国後には、アルゼンチンから短期留学生が来日して本校で学びました。平成28年10月には9日間、ドイツ姉妹校フィルダーベンデンから16名の高校生が本校を訪れ、授業や部活動に参加して交流しました。12月には、中国高校生訪日団の生徒28名が来校し、交流を深める機会がありました。また、今年も京都府教育員会の支援を受けて選ばれた生徒がエジンバラ語学研修やオーストラリア語学研修に参加しました。昨年度から始めた米国高校生徒とのメール交流プログラム「グローバルクラスメート」も継続して多くの生徒が取り組んでいます。

文武両道の「武」は、学業以外で取り組むプラスα（アルファ）に当たるもので、部活動やホームルーム活動、学校行事等を通じて身に付ける力を表しています。本年度の部活動には、91％の生徒が取り組み、ハイレベルな文武両道をめざして学習と部活動の両立に汗を流しました。今年度の成果として、ダンス部が日本高校ダンス部選手権全国大会に出場し、山岳部女子1名が全国高等学校選抜クライミング選手権大会で全国大会に出場しました。また、剣道部を始め、数多くの部が、近畿大会に出場しています。

山城高校には、学校を愛する心や伝統を大切にする心と共に、新しい道を切り開いていくパイオニア精神が息づいています。このパイオニア精神は、これまで山城高校が大切にしてきた自主・自立と共生の精神と一つになった「山城スピリット」としていつまでも受け継がれていくことを願っています。山城高校に入学した生徒一人ひとりが「チーム山城」の一員として高め合い、卒業後も生涯にわたって「チーム山城」の絆でつながっている学校であり続けたいと思います。

同窓生の皆さまにおかれましては、ますますの御発展をお祈り申し上げますとともに、これからも「チーム山城」への御支援をよろしくお願いいたします

目　　次

刊行によせて …… 京三中・山城高同窓会　会長　森　貞男 …… 1
「チーム山城」 …… 京都府立山城高等学校　校長　前島　巌 …… 2
木版画「美山」の制作と回想の京都北山 …… 三中・36回　川那部　昭 …… 5
論語の仁問答と現在の出来事 …… 三中・36回　髙須　壽一 …… 8
最後の戦中世代 …… 三中・37回　平岡　静哉 …… 9
私のスキー歴 …… 三中・38回　森　克巳 …… 10
一海知義兄「お別れの会」に出席して …… 三中・38回　森　重信 …… 14
ハガキによるお便り …… 14
厳冬期皆子山西尾根登山 …… 山城11回　阪本　公一 …… 16
「ヘルプマーク」をご存じですか？ …… 山城11回　西村　圭子 …… 19
貴重な体験をしています …… 山城12回　田中　秀樹 …… 19
終わり良ければ全て良し …… 山城15回　伊藤　浩介 …… 21
「アトランタからの手紙」 …… 山城15回　鈴木修一郎 …… 23
「裁判外紛争解決手続き」の一端に関与して …… 山城15回　宮本　照夫 …… 24
師への想いを布教にかえて …… 山城15回　山田　一道 …… 26
〝漢語一会〟 三中38回・一海知義先生を思う …… 山城18回　前田　幸一 …… 28
故郷再訪、仁和寺・嵯峨野・大文字山へ紅葉狩り …… 山城18回　中尾　四郎 …… 29
「谷根千」散策と上野でランチ …… 山城18回　中尾　四郎 …… 31
楽しい定年後 …… 山城18回　松木　利夫 …… 31
メコン川を遡る …… 山城19回　中村美知子 …… 34
愛しのダンヘ …… 山城19回　船越　周 …… 36
おやじバンドやってます …… 山城20回　谷口　陽助 …… 37
ハガキによるお便り …… 39
各期・各会の報告 …… 39
『防人の詩』（十八） …… 41
姉妹校フィルダーベンデン校との交流 2016年 …… 42
山城高校との交流　2016年秋 …… メルレ ヴェルパッシュ …… 44
山城スクールライフ　第1号・第2号 …… 46
クラブ活動 …… 50
新聞記事抜粋 …… 64
寄付者芳名 …… 64
強い同窓会をつくりましょう …… 65
編集後記 …… 65

（お断り：本文中特に表記がない場合は原稿作成時の年月です。）

木版画「美山」の制作と回想の京都北山

三中・36回　川那部　昭

一九八八年四月、朝日カルチャーセンターの木版画教室に入った。それ迄も毎年木版画の年賀状を作っていたが、我流で年一回彫刻刀とバレンを手にするだけで、なかなかうまく刷れずに四苦八苦していた。また、多色刷りもやってみたかった。丁度勤務も閑になったので、この機会に本格的な手ほどきを受けることにしたのだ。満60才のときである。

木版画は、先づ下絵を描き、トレーシングフィルムに輪郭を写しそれを反転してカーボン紙で版木に写す。多色刷りの場合は色数だけの版木が必要となる。そして彫り、和紙に刷る。最終の版まで刷ってみて、不具合な個所、変えた方が良い個所は、彫り直し、色を変えてまた刷ることを繰り返す。納得できる作品を刷り上げるまでには大変な手間と時間がかかる。

こうして二十八年が過ぎて、体力の衰えを嘆きながらも未だに続けている。

一九八九年、埼玉県桶川市に終の住処を定めた。ここが旧中山道の日本橋から六番目の宿場であったことから、旧中山道の宿場を訪ねて、古い町並みの木版画を制作し始めた。二〇〇九年十二月、中山道の旅と版画制作を終えて、個展を開いた。幸い好評で、多くのお客様に来ていただいた。

さて、次はどの街道にするのか、と聞かれることも度々あったが、年齢を考えると再び街道をとりあげると、途中で止めなければならなくなる可能性が高い。そこで、次は重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）の町並みを、あちこち拾ってみようと思い立った。これならどこでやめても悔いは残らない。

二〇一一年、「美山」を訪ねることを計画した。ここは茅葺きの民家がまとまって残っていることから、一九九三年に重伝建地区に指定されている。京都府南丹市美山町北というのが所在地で、山陰線の園部駅からバスを乗り継いで行くという。二万五千分の一の地図「島」の右上隅の由良川沿いに「北」の集落を見つけた。更に「中」「花背」「大原」と地図を買い求めて眺めていると、嘗て歩いた懐かしい峠道や集落の名が見出されて、三中山岳部時代を回想することとなった。

一九四一年、二年生の十月に学校主催の伊吹山登山に参加して以来、山に行ってみたいという思いが強くなり、年末に山岳部に入った。そして先づ、先輩たちに連れられて行ったのが京都北山であった。

京都北山は、京都市内から北の方向に、東の比叡山と西の愛宕山の間に見える山々を指し、北限は由良川上流の若狭の国境に至る山域を言う。由良川水系の山域を丹波高原と言うこともあるが、私達はひっくるめて北山と呼んでいた。九七一・五mの皆子山が最高峰で、大体四〇〇から六〇〇mの緑豊かな山々が連なっている。

新入りは健脚の上級生たちについて歩くの

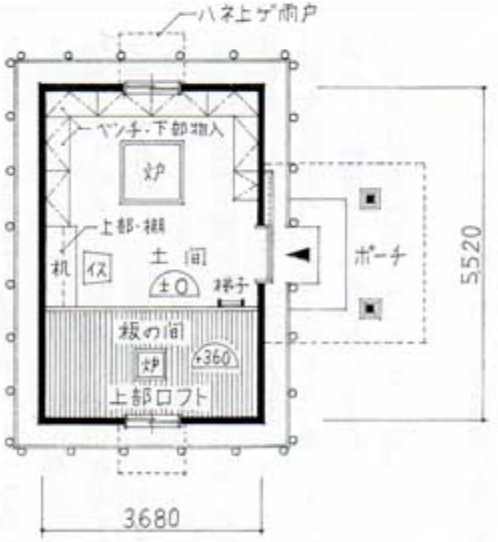
に必死であった。一年上に伊谷純一郎さんと山口克さんがいたが、この二人の健脚ぶりは際立っていた。後に伊谷さんは京大で今西錦司の門下に入り、日本猿の研究からアフリカ奥地のチンパンジーの研究を進める世界的なフィールドワーカーとなり、山口さんは、桑原武夫を隊長とする京大チョゴリザ登頂隊の一員に選ばれるアルピニストに育った。

京都北山には、細かい谷と尾根が入り組んで、谷沿いに小さな集落が点在し、集落をつなぐ峠道があった。当時は登山道というものは無く、山頂に行くには谷筋をたどり、適当な処から尾根にとりつき、藪を漕いで頂上を目指すしかなかった。私達はこの藪漕ぎを「ジャンジャン」と呼んでいた。又、谷筋の多くには木馬道があった。これは、丸太を45㎝程の間隔で横に並べ二本の杭で地面に固定し、その上を伐り出した木材を積んだ木製の橇（木馬という）を人力で滑らせながら下ろす為の桟道である。地上に設けられることが多いが、谷の合流する所を横断する場合などは、宙に浮いた状態になる。雨の時は滑りやすく、何より木馬道に合わせた歩幅やリズムで歩かねばならず、決して楽ではなかったが、道のない谷を歩くことを思えば大助かりであった。また、はっきりした道が出来ているので調子よく進むうち、炭焼き小屋の前でぷっつりと途切れることもしばしばであった。つまり山道は山に住む人々の生活道路であり、私達登山者はそれを利用させてもらっていたのである。

こうした山行を通して、私は登山の基礎を少しずつ学んでいった。地図の読み方、現在位置の確認、ルートファインディング、藪漕ぎの技術、そして山のマナーと山を愛する心。更に必ずタイム記録をつけること。この習慣は現在も身についていて、旅行をすると必ずタイム記録をつけている。

一九四二年十一月、三中山岳部待望の山小屋が完成した。先輩達の熱意とご寄付により、一中の北山荘、二商の麗杉荘に次いで漸く実現したものである。花背峠から長い尾根を歩き、大見の集落を経て前坂という小さな峠を越えると尾越の集落に出る。小屋は尾越から芦火谷に沿って少し下り、二の谷を入った所にあり、「芦火荘」と名付けられた。外壁は半割りの丸太をログハウス風に横張りにし、内部は杉の堅羽目張りで、平入りの入口にポーチがついていた。山岳部会報「三角点」第六号の木村義照さんによる紹介文と私の記憶をもとに図面にしてみた（図参照）。

小屋開きは十一月二十二日に校長先生を招いて行われ、以降、芦火荘を拠点に八丁平や峰床山、大悲山方面を目指す山行が多くなった。



当時、森本次男著「京都北山と丹波高原」という案内書が私たちの北山歩きのバイブルであった。森本氏は京二商の教師であったが、「朝史門」のペンネームで「山と漂泊」という詩情あふれる随想書を著している文筆家でもあり、「京都北山と丹波高原」も山の案内書でありながら、全体を流れるリリカルな文体に魅せられて、多くの北山好きが育っていた。私も次第に登頂よりも峠から峠へ、集落から集落へと、この本を携えて一人で徘徊する山歩きが好きになっていった。特に気に入ったのは森本氏も推奨の「寺山峠」で、京都を朝ゆっくりと出発しても日帰り可能なことから、何か屈託があるときなど、ふらりと訪れて峠に立つと心が晴れて、いやされる気がした。

しかし、一九四四年、中学生にも勤労動員が発令され、五月に五年生が、秋には四年生も愛知県半田市の中島飛行機製作所に動員され、山岳部の活動は中止を余儀なくされた。戦後、私は旧制松江高等学校を卒業して間もなく肺結核を発病し、三年の療養の後、一九五二年四月、改めて新制の京大建築学科に入学したが、授業に出るのが精一杯で、山などもっての外であった。一九五八年、修士課程を修了し、東京に職を得て京都を離れた。一九七三年頃であったか、当時小学生だった二人の子供の夏休みを利用して、妻と子供達を連れ、京都に一人住まいをしていた母の処に行った。そして一日、妻と子供を連れて北山に行くことにし、選んだのが寺山峠であった。貴船口から芹生峠に向かう道では数組のグループと一緒で賑やかであったが、芹生を過ぎると私達だけとなり、静かな山行となった。そして寺山峠。そこには、静かな、しかし明るい、昔と少しも変わらない峠の風情があった。

別所から鞍馬行きのバスに乗ったら、偶然、伊谷さんと出会った。卒業以来の再会だった。彼は一人で大悲山に行ってきたという。丁度その頃は、今西錦司の後を継いだ伊谷さん達の、タンザニアでのチンパンジーの研究が進められている時期と聞いていた。アフリカの奥地を駆け回り、帰国すれば論文作成や著述に忙しいだろう彼が、一寸の休みに北山を訪れている、ということに驚くと同時に、彼にとっても北山が心の故郷となっていることを知って、感動し、嬉しかった。

その後母を引き取り、京都の拠点を失って、北山にはすっかり縁遠くなった。そのうえ年を重ねて体力も衰え、山は勿論、町歩きもやっとという私が、美山を訪れることで再び北山の一隅に足を踏み入れることとなった。

二〇一一年六月、朝東京を発って一四時三〇分に「北」に着いた。茅葺きの屋根は棟に千木を載せた特有の形式で、物置等を除いて瓦屋根やトタン葺きの住家は一軒も見当たらない。見事である。集落内をくまなく歩いて、茅葺き屋根がゆるやかな坂の上へと連なる風景をスケッチした。

二〇一五年夏になって、温めていたスケッチを基に美山の木版画を完成させて、二〇一六年五月、京都で開催された「京大建築同人絵画展」に出品することが出来た（表紙参照）。

私はこの木版画で山里の静かな佇まいを表現したいと思ったが、完成に近付くにつれ

て、こうした風景は昔北山のあちこちで見たような記憶が蘇ってきた。大学院生の頃、八瀬ですら沢山の茅葺き屋根の重なりをスケッチした記憶がある。別所や大布施、大見や尾越など、すべての住家は茅葺きであった。長い年月を経て、建て替えや開発によって、北山の集落が変貌を遂げる中、由良川の畔の小さな集落がひっそりと取り残されて、それが今や貴重なものとなって、「茅葺きの里」として人々を集めているのだ。

北山の変り様はどんなであろうか。地図を見ると、芹生峠も車で越えられるらしい。皆子山にも峰床山にも三角点迄通じる山道が複数見られるではないか。

残念乍ら、現在の北山を歩いて自分の目で確かめることは出来なくなった。私は、木版画の「美山」を眺め、地図を見ることで、昔を偲び、今を想像することしか出来ないのだ。

論語の仁問答と現在の出来事

三中・36回　髙須　壽一

三中三年の時より長尾伴七先生の副漢文が始まり、三年の時は十八史略、四年では論語を教えられた。論語は孔子（BC552あるいは551～479）及び弟子たちの言行録で「仁とはなにか」で師弟間の問答を書いており、各弟子はそれぞれ良い答えを述べるが、最後に顔回（又の名は顔淵）が「貧にしてよく楽しむ、これぞ仁なり」と言ったら、孔子は「さすが顔回、良いことを言う」と言われたことが終始忘れられず、昭和22年、終戦後の大不況の時に就職したが、物資は不足し安月給で食うや食わずの困難時で、皆貧困に耐えて生活するも、私は仕事後は麻雀をし、安い居酒屋で酒を飲んだりして楽しんだ。

論語の最も重要なトピックは仁であり、仁とは人の道であり「人間の愛情に関する言葉であるに違いない」と中国古典選の論語のまえがきでも吉川幸次郎は述べている。

2001年JR山手線の新大久保駅（東京都新宿区）で線路に落ちた男性を助けようとしてカメラマンの関根史郎さん（当時47歳）と韓国人留学生の李秀賢（リスンヨン）さん（当時26歳）が飛び込み、電車にはねられ皆死亡した時の新聞報道の見出しで「身を殺して仁をなす」と出たので、こんな時は身を殺さねばならぬのかと思い、前述の論語の本を調べたら「身を殺して仁をなすこともある」と述べられていたのでほっとした。もし自分がその場にいたら、瞬間の判断で落ちた人を助け自分も助かると判断したら飛び込むが、これは無理と思えば傍観したろうと思った。

2013年の新聞報道で「高齢者助けようと踏切事故死の女性」の見出しで、2013年、横浜市緑区中山町のJR横浜線の踏切内で、男性（74歳）がふらふらと踏切内に入り横たわるのが見えると、同区の会社員村田奈津恵さん（40歳）が父の車から飛び出し助けようとして踏切内に入ると、きゃしゃな体で男性を動かそうとし電車にはねられ亡くなった。これを見ていた女性（57歳）は「男の人は、電車には巻き込まれていなかった。意識もあり起き上がろうとしていた」と話したが、父は「困っている人を放っておけない子だった。目の前で男性が横たわり、奈津恵もびっくりしたのだろう」と涙を浮かべた。と報道されたが、これぞ身を殺して仁をなしたと思った。

我々は子供の時より「よく遊びよく学べ」と教えられてきたし、孝経の教えでは「身体髪膚これを父母に受く、敢えて毀傷せざるは孝の始めなり」ともあるし、やはり瞬間の判断力が必要と思う。中学3年の初め、足が速かったのでラグビー部の要請で試合前1週間の練習で右ウイングとして試合に出たし、専門学校入学時よりラグビー部の主将としてスタンドオフで試合に出てきたが、敵・味方の配置を瞬間的に見て、どうするか判断して行動してきたが、就職して仕事をする上でも、何が必要か判断し行動してきた。

戦後の貧の時代も工面して毎日を楽しんできたが、昭和30年代よりの高度経済成長時でも必要な勉強は通勤途中の電車の中でも寸暇を惜しんでやってきたが、社交ダンスや山登り等も充分にやり人生を楽しんできた。55歳定年時、67歳まで働き、仕事でも遊びでも充分やってきたし、今や90歳になるが、行きたい外国旅行もほとんどこなしてきたので、今や何の思い残すこともない。

上野の国立西洋美術館の近くに伊藤英世博士像があり、その後の森の人通りのない小道に西暦４００年百済より論語と千字文を持って来朝した王仁の像あるも、これを知る人はほとんどいないようだ。

最後の戦中世代

三中・37回　平岡　静哉

七巡目の巳年が巡ってきた。あっという間だったのか、色々の思い出が詰まった長い年月だったのか、今あらためて振り返れば、巳年は私にとって不思議に節目の年だったようである。

私の生まれた昭和４年（１９２９年）といえば、第一次世界大戦のあと、深刻な不況と軍部の台頭という重苦しい時代であったが、やがて満州事変にはじまった中国への侵攻、太平洋戦争、そして敗戦という波乱の中で少年時代を送った。もとより、そんな子供の頃は、他愛のない記憶しか残っていない。

二度目の巳年、昭和16年（41年）12月に真珠湾攻撃が起った年は、中学一年生であった。通学は、戦闘帽（野球帽に似た）、下駄履きからゲートル、編上靴に変り、小銃を担いで兵隊の真似事をする軍事教練の時間がふえて来た。何キロかの行軍をさせられたり、農家の手伝い、火薬庫への一泊の勤労奉仕というものにも何度か駆り立てられた。あげくは、19年初夏からの愛知県の軍用機製造工場への通年勤労動員だった。作業の合間に授業をするとの約束も空手形、毎日、みすぼらしい宿舎と工場の間、片道4キロの往復であった。そしてその年の12月7日に予期せぬ大惨事、東南海地震による工場の倒壊のために、我々の同級生13名の命が奪われてしまった。同年の春、海軍兵学校に合格していた私は、幸いにも難を逃れ、翌20年の早春、江田島に入校した。激しい訓練はもとよりだったが、時の校長の（敗戦を見すえた）明察から、英語をはじめ基礎学科にも精励させられ、ここで終戦を迎えた。

三度目の巳年は、医大卒業の年だった。それからインターン、研究生活、臨床医としての勤務、そして父のあとを継いでの開業医、無我夢中のうちに過ごしてきた。数年前、加齢に加えて、いささか体調を崩したので、医業を次代に委ねて、ぼんやりと毎日を過ごしているうちに、七回目の巳年を迎えることになった。

今、この稿を書きながら、来し方を振り返ると、私にとって終生忘れることの出来ない思い出は、二回目の巳年を迎えた昭和16年からの4年間であったと思う。その証しとして、あの地震の惨禍で弱冠10代の前半に命を奪われた13名の級友達の命日の12月7日に、戦後

一度も中断したことなく中学クラス会が続けられていること、また大戦末期、同じ体験をした海軍兵学校ＯＢの親睦の集いが、今も続けられていることであろう。矢張り、戦争の残渣を、今も味わい続けている我々世代の持つ宿命かもしれないと思っている。

私のスキー歴

三中・38回　森　克巳

一

昭和5年生れの私にとって幼少期の記憶に残る一つに紙屋川の氾濫がある。

秀吉が造った御土居に沿って流れる紙屋川は丸太町通り、西大路通りと交差し徐々に小さな峠を形成する。現在のように改修されるまでは川底も次第に高くなり大雨で川水が溢れて最も低い山陰線のガード下に水が溜り市電や車などの交通を止める。当時は水はけが悪く水溜りとなる。昔からこの辺りは湿地帯であったらしい。年末恒例の府県対抗高校駅伝はこの西大路通りを走るが、アナウンサーも太子道へ向けての登りからガード下への降りを駆け下り、続く北大路へ向かっての登りにかかる頃必ずここが勝負所と叫ぶ。このような坂道であるが、冬場雪が降り積ると格好のスキーの滑走路となる。西大路通りは下立売通りまで、丸太町通りは馬代通りまでの時代である。肥桶を積んだ牛車が市電に並んで往き来していた時代である。

運動具店を経営していた父は大正13年に洛西スキー倶楽部（後に比叡スキー倶楽部と改称）を創設し昭和初期の京都のスキー界の発展に寄与した。しかし当時はスキーは珍しいスポーツであったろう。子供用のスキー用具は揃っていた。雪が降り積ると市電も車も走らなくなり太子道からガード下に向かっての坂道は子供にとって適度な距離と斜度のある滑走の場となる。最も古い記憶で父が千本丸太町の銀行へスキー滑走で行くのに板の上にのせて連れて行ってもらったことがある。又、早朝に五条坂を滑ったこともある。

小学生時代最も足を運んだ所は花背スキー場である。比叡山の蛇ヶ池スキー場へも行ったが滑走距離が短くまた傾斜も緩くスピード感が少ない。しかし蛇ヶ池からケーブル乗り場までの道を一息に飛ばす楽しみがあった。しかし戦後は道路の滑走は禁止された。

シーズン中の日曜日には度々花背に向かった。未だ暗い早朝に出町柳から一番電車に乗って鞍馬に着き、そこからバスに乗って旧花背で降り――雪の深い時は鞍馬から歩いて――峠まで登り、峠からは細い山道を停止を重ねながら新道との合流点まで滑る。そのあとバス道の新道をスキー場入り口まで滑る。そこから板を担いで約15分程登るとゲレンデに着く。このゲレンデが好いのは市内に比べて雪質がよいこと、斜度も適度でジャンプ台に沿う傾斜もあり滑走距離も長いことである。しかもスキーヤーも比較的少ない。父と同伴した時は川沿いの旅館に一泊して翌日長時間スキーを楽しんだ。

帰りは距離の長いバス道を避け急な坂の近道を登って新道の峠に登る。そこでスキーを着けてなだらかな道を峠下まで、あるいはバスの通らない時は鞍馬まで滑った。70余年昔のことである。他に楽しみが無かったこともあろう、とにかく両親は黙ってみていてくれたことである。とにかくスキーが身についた頃のことである。店へはスキー倶楽部の人達が出入りし父とよく話し合っていたが、私がその中に入れる筈もない。

小学5年生の頃のことと思うが、倶楽部の有志の人達に連れてもらって新潟県高田市にあるスキー学校に行くことになった。

越後高田の金谷山は日本におけるスキー発

祥の地とされる。明治の末オーストリーのレルヒ少佐が第13師団歩兵連隊に派遣されて将兵にスキー技術を指導した。一本杖のスキーである。回転技術は現在もスキージャンプの着陸時の姿勢の望ましい型とされるテレマークである。

二

ここで父（森　弥市）が編集し発刊した京都スキー年鑑（昭和12年12月）の記録及び京都府体育協会史から京都及び近畿のスキー場についてその開発の経緯をみてみよう。スキー場が無ければスキーは楽しめない。

京都のスキーの歴史は中山再次郎氏とともにあったと言ってよい。小谷隆一氏によると、中山氏は明治26年に東京帝大卒、高田中学校の教諭となり後京都府立第一中学校の教頭として赴任し、府立二中の創立と当って初代の校長に就任された（明治33年）。大正初期から中山氏は一中、二中の現役及び卒業生を伴ってスキー場の調査開発に努められた。大正2～4年、伊吹山、比良山、大正9～15年にかけて大江山、成相山、夜久野を、大正15年に比叡山、昭和2年に但馬妙見山スキーコースを昭和5年に愛宕山等のスキー場の開発指導された。マキノは昭和3年、花背は昭和6年と記録されているが関西の主要なスキー場の開設に関係しておられる。中山氏は京都のスキー界の発展に寄与され京都スキー連盟の結成の中心となって連盟発足時には顧問となっておられる。

ここに列挙されたスキー場に函館山の名が無い。頻繁に通ったスキー場の一つで戦後も整備された山へ家族で行った。戦前は前日に江若鉄道（今のＪＲ湖西線）で浜大津から今津へ、そこからバス或いは徒歩で県道を通って県道沿いの部落の農家（スキー小屋の経営も兼ねる）で一泊する。翌早朝、板をつけて山麓まで行き、そこからシールをつけて急な山道を登る。ゲレンデでは同行の父とその友人ら数人でラッセルをしながらスキーを楽しむ。時には更に奥の処女湖に向ってツアーすることもあった。下山は山スキーの技術がためされる。林間の細い山道を緊張の連続で滑る。

戦後かなり経ってゴンドラやリフトが設置されるまでは滑走・登行に有効なワックスの利用が欠かせなかった。雪質・雪温にあわせてワックスを塗るのはスキーの技術の一つであった。ワックスがうまく合うと登りが楽で滑走はよく滑る。これで失敗した苦い経験がある。

昭和29年3月28、29日志賀高原木戸池スキー場で西日本医大冬季大会が行われた。私達はスキー部として参加（私は卒業していたが各大学とも認められた）した。私達の大学は優勝し、私は滑行、回転ともに優勝したが、滑行の時である。コースは横手中腹ののぞきの小屋から湯坂辺りまで。想定した雪質に応じてのワックスを塗り横手に向って登行。途中から雪が降り出し次第に吹雪となる。登りは割に楽に登れた。スタート地点に来て板の滑走面をみてみようと板を立て掛けると塗ってあったワックスが板状になって剥がれた。温度に全く合っていない。持ちあわせのワックスもなければ時間もない。滑走面を布で磨いたままの状態で諦める。スタートの合図で飛び出したが偶然にもその時吹雪が止み視界が広がった。積った新雪のためもあってよく滑らないが他の人達も同じ条件と飛ばした。先行の走者に追いついて追い抜きゴールした。若しワックスが剥がれずにそのままだったらスキーは滑らなかっただろう。学生時代最後の優勝直滑降だった。

三

私が永年に亘ってスキーをスポーツとして、又趣味の一つとして楽しんでこれたのは父が家業として運動具店を経営し、それを継いでくれた弟のお陰であり感謝以外の何物もない。物心両面で支えてくれたからである。前述したが父は大正13年に洛西スキー倶楽部

創設の中心となり大正15年には比叡スキー倶楽部と改称した。そしてこの頃から活気を帯びてきた京都スキー界の組織化にかかわり京都スキー連盟の創立（昭和9年12月）、京都スキー年鑑の編集及び発刊（昭和12年12月）の成果を導いた。

この頃までに京都及び近隣のスキー場の開発、開設が進められていた。伊吹（大2）、比叡山（大15）、マキノ・朽木（昭3）、愛宕（昭5）、花背（昭6）等々である。小学高学年、中学1～2年でよく利用した函館山の開設の記録はない。この外足跡を残したスキー場を挙げると、八丁平、越畑、比良、奥伊吹等があり、山陰線沿線では神鍋、鉢伏、大江山等がある。北陸沿線では白山山麓（白峰、勝山等）、立山山麓（極楽坂）が、信州では白馬山麓の栂池や乗鞍、又、関、赤倉、妙高、黒姫、野沢、志賀高原各スキー場、菅平、霧ヶ峰等がある。昭和50年頃から宅配便で荷物の輸送が便利になったこともあり北海道へ行くことが多くなった。札幌国際、ニセコ、キロロ、夕張、サホロ、富良野、大雪旭岳等々が懐かしく思い出される。

三中在学中（昭和17．4～昭22．3）に当時山岳部に属していたが、仲間（竹中、佐々木）とスキー部を独立させて行動を共にした。山形の月山へは二度行ったが一度は彼等と、二度目は市立病院時代に同僚のI君と。大学時代は学部2回生の頃友人達とスキー部を立上げ、K助教授を部長にお願いした。この頃からスキー場へ直行するスキーバスの運行が行われるようになり、特にマキノへはよく利用した。大学職員を対象にスキーバスでのマキノ行が企画されスキー部も参加した。2台のバスに分乗し、往路では社内でスキー技術の説明を行い、ゲレンデでも初心者に対処した。昼頃から降雪が続き帰りのバスの運行が危なくなった。停車と徐行を重ねたが結局車中で夜を明かすことになった。このことは今でも語り草になっているが、外科の先生方や看護婦も乗っており翌日の手術に影響を及ぼしかねない。当時のこと連絡の方法もなく翌早朝に大学に戻り事なきを得たとのことであった。

また大学時代のスキー行として思い出深いのは昭和27年1月の熊の湯・万座ツアーである。この時には妹も同行し参加者は10人程だった。バスは途中の発電所下まででそこからは雪原を歩く。丸池には丸池ヒュッテがあるだけで今のようなホテル街はなく蓮池、木戸池とひたすら歩いて熊の湯温泉に着く。温泉は雪が吹き込む有様。天候を見計らって万座温泉へのツアーに出発。足の揃った6人で妹も一緒。横手を迂回して渋峠を越えて万座に至る。私は雪眼を我慢する。翌日は深雪でゲレンデスキーを楽しむことはなく熊の湯で待つ仲間に心配をかけては、と降り積った深雪の中交代でラッセルしながら復路をとる。全員無事に帰ったが、今にして思えば若さがすべてだったと思う。危険と隣り合わせのツアーだった。

四

大学時代に最も多く行ったのは神鍋山だった。山陰線の夜行列車を利用し、江原で降りバスに乗り換え栗栖野まで行く。深夜に行きつけの民宿で仮眠をとる。昭和28年頃には北斜面には舟ソリ型のリフトが設置されていた。その便利さに溺れて強引な滑走を重ねその結果捻挫を時に経験した。民宿の方は粉を酢で練って布にのばして患部に貼ってくれた。この民間療法の効果はあったと思う。今一つ思い出すのはスキー部の合宿で菅平へ行ったことである。この時も脚の揃った者を選んで根子岳へのツアーを計画した。快晴のもと頂からの快適な滑降が懐しい。また昭和28年末から正月にかけて八方尾根の黒菱小屋で合宿した。この時同行していたN教授の子息が脚を骨折した。先輩の先生方とも交替で背負いながら下山したこともあった。又山

城高校の山岳部の人達数名と笹ヶ峰の京大ヒュッテで合宿したこともある。この時はスキーのコーチとして同行した。信越線妙高駅から小屋までの登り道を荷物をかついで登りゲレンデらしい所のない斜面で練習をした。しかし帰途はかなりの林間滑行を楽しむことが出来た。また志賀高原蓮池の京大スキー部ヒュッテ（改築される前の）に泊めて貰ったこともあった。大学最後のスキー行はKと二人で行った関温泉だった。卒業試験が早く終ったので卒業式までの期間を利用して出掛けた。宿泊した笹屋旅館では元国体少年部優勝の和郎さんの指導をうけることが出来た。この時燕温泉を通って赤倉温泉へ行きツアーも楽しんだ記憶がある。そして卒業式は日焼けして真黒の顔で出席した。

インターン時代は大学スキー部のコーチとして同行したこと、京都料理学校の生徒さん達のコーチに頼まれて神鍋へ、研修病院の第二日赤の先生方とリクレーションで行ったこと位の記憶である。

昭和30年大学医局に入ってからは研究・臨床に専念しほぼ10年余りスキーとははなれた生活が続いた。

昭和42年12月京都市立病院に赴任して諸先生方との交流の中でスキーの話題が多くなり同行することになった。10年程前の道具はそのままで。この間に進歩したスキー用具にくらべると骨董品のようであった。次第に新しく揃えていったが板は弟から譲られたものを使った。弟は商売上新製品の試乗が欠かせずその度に目新しいモデルに乗ることが出来た。当初の数シーズンは志賀高原ホテル（今はない）の相部屋、時に屋根裏如き部屋に雑魚寝をし、食事はホテル並みにダイニングルームで豪華に、といった風であった。T先生が診療室の仕事を受け持っていた関係もあった。往復は自家用車に分乗して行き私は大変楽な行程だった。ホテルから蓮池ロープウェイ乗り場まで林間を横切って真直ぐに行くことが出来た。

市立病院のスキーグループはメンバーの入れ替えや看護婦の参加もあるが形を変えて今も続いている。

嵯峨・大河内山荘の大辺兄弟が白馬落倉にシェーネベルク白馬を建設してからは次第にこちらに行先が変った。京料理も魅力の一つだった。冬季は無論栂池でのスキーではあるが夏は避暑もかねて八方尾根や白馬自然公園への足場となった。落倉から白馬への夏道に沿って今は山荘やヒュッテが並んでいるが当時はなかった。栂池からシェーネまで林間を滑って帰る楽しみもあったが今は駄目なようだ。

平成12年5月、永年総婦長を勤めたKさんの退職祝賀会でY婦長からスキーに行く機会があれば、と頼まれ、次のシーズンから彼女ら三人をシェーネベルクへ同行した。2～3年同行したが以降は各自で行っているようだ。

保健所勤務時代（平元～7）、支払基金時代（平7～16）には職員の方々と時に先生方と栂池や勝山などのスキー場を訪れることもあったが、次第に家族スキーに行くことが多くなった。子供達から孫達へと移ったが。

弟が復活した比叡スキークラブへは妻と共に参加し、奥志賀ホテルや新築改築された京大ヒュッテを拠点に奥志賀から横手渋峠へとリフトを利用して様々なゲレンデを楽しんだ。

平成10年1月、ペースメーカーを装着することとなり予定されたスキー行は中止となった。その後スキーに行くことに変りはなかったが、ペースメーカーの心拍数の上限が150にセットされているため今まで一息に飛ばして滑れた斜面を一～二度息をついで整えるため停止せざるをえなくなった。スキー滑走時心拍数が150を超えることは恒常的である。

平成15年秋頃から視力障害が現れて加齢黄

斑変性症と診断された。このため翌年5月に辞職した。この視力障害のため斜面の凸凹を判別することが殆んど出来なくなり転倒することが多くなった。幸いセーフティービンディングのため骨折や捻挫はなかった。しかし二度の大転倒で大きく飛ばされた。一つは神楽坂で、一つは奥伊吹であった。後者の場合は頭部から雪面に叩きつけられムチ打ち症のような症状があった。このことがあってスキーを止めざるをえなくなった。通算60余年のスキーとの付き合いに終止符を打った。

若い人達はスキーよりボードに向い、ゲレンデの中央で腰をおろしたり寝そべったり、時には危険な衝突事故をおこしたり忌ま忌ましい気持ちで眺めていたが、スキー人口も減ってきたようだ。

一海知義兄「お別れの会」に出席して

三中・38回　森　重信

平成27年11月15日畏友一海知義兄が逝去され、12月20日神戸大学鶴甲キャンパスにて「お別れの会」が催され出席した。国際文化学部他多くの関係者が広い教室をうめた。思い出のアルバム等を交え、公私に亘る彼のありし日・生涯を回想した。

広い教室、萬座の様子からもファンが如何に多いか。京都大学で気鋭の中国文学研究者吉川幸次郎教授の指導を受け、陶淵明・陸游はもとより多くの漢詩等その研究は広範囲に及び多くの著書を出版し、気骨の中国古典文学者で、全国に多くのファンがあった。

博学で、酒を愛し、ユーモアや冗談を交え、高いレベルの学問の内容もやさしい言葉で伝え定評、特に女性のファンが多かった。小生も「漢詩の散歩道」等に引きつけられた一人である。又、小生の木版画展にも気軽に来展してくれた事もあり、かけがえのない畏友をなくして残念です。

時を同じくして長い間幹事の尽力で続けていた同窓会も5月25日に中止やむなしとしたところであった。今後は体調をみて、京三中・山城高同窓会で再会できる事もあろうと思います。

何れにしても小生の心にはあの京三中の青春の一時期は忘れる事はありません。（会誌双ヶ丘第10号P11参照）

ハガキによるお便り

三中・34回　東野　裕

会誌十号ありがとうございます。
現在九十一歳　感慨一入です。

前略

貴会会員でありました父、谷本岩夫が過日、死去致しましたのでお知らせいたします。

2016年9月10日　享年87歳　谷本岩夫

37期卒業と思われます（京三中三七会という、おそらく同期会に名を連ねておりました）。

葬儀などは、故人の遺志により近親者のみで済ませました。このお知らせにつきましても、故人の遺志を尊重し、逝去から時間を経たこの時期となりました。なにとぞご理解をいただきたいと存じます。

京三中における青春は、多くの友人に囲まれた、極めて朗らかな時期であり、生前しばしば、その時期の交遊について語っておりました。これまでのご交誼に心から感謝を申し上げます。誠にありがとうございました。

草々

谷本　裕

三中・38回　**岡波　泰造**

幹事の皆様のお世話に心から感謝しております。当方現在87才。70歳以降、大腿骨骨折、股関節置換手術2回を受け、現在杖を使用しつつ、毎日雨の日も風の日も、リハビリを兼ね散歩しております。何時まで続けられるか判りませんが、出来る丈続け、自分のことは自分で出来るように備えたいと思っています。

三中・38回　**佐々木成夫**

平素は、同窓会の運営面、「双ヶ丘」会誌の発刊等でいろいろとお世話になっております。会誌の、なつかしい近況報告記事や、諸兄姉の活動ぶり等読ませてもらっています。

小生86歳の現在、「生きる」ことの大切さ、少しでも長生きをと願い、健康に留意し乍ら日々を過ごしていますが、2年程前より坐骨神経痛（脊柱狭窄症）をわずらい、毎日リハビリに通院、好きなテニスも思うように出来ず（体調のましな時位のテニスをしていますが…）、日々を過ごしています。「生きる」ことの大切さ、むずかしさを痛感しています。先日も救急車で入院、1日だけで退院しました。

市内の保養施設の温泉に入浴、体調を考え乍ら入浴したのですが、サウナ内でダウン、周りの人の通報で救急入院？　急激な温度による酸欠（一種の熱中症？）状態でした。健康に十分配慮することのむずかしさを。

三中38回、山城1回　**村主　耿介**

3年前背中を複雑骨折し入院、昨年は転居、同時に肺炎にかかり約半年又第二日赤に入院、何とか全快、現在に至っていますが、毎日朝ひるぱん床の中で過ごしています。

三中・39回　**四方　修**

亀岡市出身の私共は昭和18年入学すると藤森校長室に呼ばれて「今まで亀岡出身の生徒は竹岡君の兄さんを初めみんなよく出来たから、君たちも頑張れ」と言われましたが、それから半年後、六クラスの担任の先生の特徴を捉えた数え唄を作り同級生に唄えとすすめているのがバレて、半日校長室の前の廊下に立たされました。

二学期の初日に、各クラスとも、一学期の成績が一番から五番までだった生徒の名前を黒板に先生がアットランダムに書かれ、その五人の中から級長・副級長を選ぶ選挙がありましたが、田舎者の私には二票しか入ってなくて、そのあと、ヤンチャをと思って出た行動でした。

三中40回、山城2回　**松尾　二郎**

人生此の世に生を受け幸せな事、現在八十四才迄生きてこられ、前発行の掲載同様実にラッキーな事です。目下私事ですが八十才になった時に平素かかり付けの医者にてその旨を申した処、一度腹の中を覗いたろか？とカメラを入れて直後に、駄目やの一喝！

胃に大きな「癌」がある！　スグ手術しなければ…と一週待にて第二日赤で手術にて全摘！　以後約四年経過目下家内は先立って二十六年になり息子の処に居候、丸四年たちました。その間京三中同窓生で癌になり先逝った数人を見送って来ました。目下食に不自由なくなんでも好き嫌いなく一人前を頂いています。私を知る方々より、元気なもんやなーと喜ばれています。これは何と云っても山城高校時代の「丁稚」こと小森先生にバスケット部での毎日〳〵の猛練習による身体で、全国制覇の一部員で有った事と社会へ出てからの事業にと病気にも負けない何かにつけて良い方へと進んでこられての現在、私にとっては三中、山城卒業は一生涯のラッキーに他ならない今日です。二年先輩の実兄は今年一月一日に他界しましたが小生は今暫くこの世に居たい、ラッキーを携えて…

厳冬期皆子山西尾根登山

（2011年2月10日～11日）

山城11回　阪本　公一

標高１０００ｍ以上の山のない都道府県は、日本では千葉県、京都府と沖縄県だけだそうである。その京都で一番高い山は、９７１・５ｍの皆子山だ。京都北山をこよなく愛された京大山岳部の大先輩の今西錦司さんが、愛娘に皆子さんという名前をつけられた。その皆子山には、私も高校時代から雪のない時も積雪期も何度も登っているが、京都でもっともブッシュの濃い藪山として有名であり、現在でも登山道がついているのは、皆子谷、寺谷、そしてツボクリ谷（芦火谷又は足尾谷の支流）の谷筋を利用したルートのみで、尾根筋からの登山道は全くつけられていない。私の母校の山城高校の山小屋「芦火荘」を利用して、積雪期に峰床山、鎌倉山や伊賀谷山に登るたびに、大見村と尾越村の間にある峠から西尾根を利用して皆子山へ登れないかと非常に関心があった。

昭文社京都北山地図

昔人間の京都の岳人は、藪こぎのことを「ジャンジャン」と言うが、積雪が１・５ｍ以上になれば、根曲がり笹や灌木も雪に埋まって歩きやすいのではと考え、雪の多い今冬に皆子山西尾根登山を実行することにした。お付きあい願うのは、堀内コンゴさん、宮川清明さん、岡部光彦さんと私の70歳前後の熟年登山者４名。

2月10日（木）：終日曇り時々小雪。

7:50/ 出町柳 - 9:15/ 小野谷口 - 10:12/ 京都林業研修所小屋 - 12:10/ 小野谷峠 - 13:20/ 大見村 - 14:00/. 前坂峠（大見と尾越の間の峠）- 15:00/P897 - 16:40/芦火荘。

7時30分に出町柳の京都バス乗り場に集合。平日なのに、比良登山に出かける梅の木経由朽木行バスを待っている人が結構多い。私達の乗る広河原行の京都バスは、産業大学の学生さん達ぐらいで、登山者は私達のみ。鞍馬までは全く雪がなかったが、花脊峠の手前あたりから急に雪が深くなり、花脊別所近辺では１ｍ位の積雪。別所より未だ北にある小野谷口で下車。

小野谷沿いの林道は１・２～１・３ｍ位の積雪だったが、雪はかなりしまっていてワカンを履けば殆ど埋まらない。正月早々からの豪雪で杉の木が何本も倒れていた。京都林業研修所の小屋を過ぎ、旧ワサビ田栽培試験田あたりまでが最も杉の倒木が多く、痛々しい。小野谷峠の少し手前の割と傾斜の緩い支尾根を登り、主稜線に出て少し南へ戻ると小野谷峠へ出た。夏なら小野谷口から１時間少しで峠に行けるのに、今回は意外と時間がかかり、峠についたのは12時10分だった。

小野谷峠から少し降りると大見村の盆地に出る。平な盆地の林の中を小川沿いに大見村へ。大見村に常住しておられる方はほとんどなく、夏場のみ時々実家へ戻って来られる人がおられるようだが、雪の深い今は全く人影なし。雪に埋もれた大見の村から尾越へ通じる谷筋の道を登る。尾越までは民家があるので、生活道路と言うことで除雪作業は行われていて、多分昨日除雪されたのであろう峠道はラッセルもなく楽に歩けた。尾越村へ越える前坂峠に午後２時に着き、荷物を峠にデ

ポして、サブザックで3時まで皆子山西尾根を偵察する事にする。

峠から支尾根を少し登ってから、北の方に延びる支尾根を上がると主稜線に出た。前坂峠の下の大見側の支谷を登って主稜線に出る事も考えていたが、前坂峠からの登りもそれほど傾斜がなくて峠からの直登が正解であった。雪はよくクラストしており、ワカンを履いて踝くらいしか潜らず、非常に快適に歩けた。灌木や藪は1・5m以上の雪で殆ど埋まっていて、大きな山毛欅とみずならの林の中を楽に歩けた。皆子山西尾根は地図でみていた通り、広いゆったりした尾根で非常に気持ちよく歩ける。40分ほど進むと、西尾根の主稜線は南に折れ曲がっている。北東のP843に連なる支尾根が北に延びていて、このあたりの地形が、かなり複雑。積雪期につけたと思われる赤色や黄色のビニール・テープが木に巻き付けてあった。又、かなり色あせたポリプロピレンのテープが木に縛り付けてあり、少なくとも3パーティの登山者が、積雪期に皆子山西尾根を歩いたものと推測された。南へ屈曲した西尾根を少し登ると左手の東の方向にP897が現れる。西尾根主稜はそのまま南に延びているが、既に3時なので本日の偵察はここまでとした。

前坂峠へ降りて、デポ荷物を回収して尾越へ。尾越の村も、どの家も深閑としてして住人は誰もいない。鱒釣り池の横を通り、二の谷の芦火荘（山城高校山岳部と芦火山岳会の山小屋）に4時半頃に到着。いつもの通り、小屋の引き戸の前には雪は貯まっていなかったが、堅くてドアは全く開かず。宮川さんのアイデイアでスコップを使って、テコの原理で強引に動かし、ようやく小屋の中に入れた。煙突を設置する者、埋もれた水路を整備して谷水が汲めるようにパイプを掘り出す者

芦火荘

と、手際よく手分けをして、夕暮れまでには赤々と燃える薪ストーブを囲んで暖まる事が出来た。寒い冬の季節に、ストーブを囲んで、山の話を肴に杯をかわす楽しさは格別だ。

この芦火荘に初めて泊まったのは山城高校を卒業して大学入試試験が終わった直後の1959年3月中旬だったが、あれから何度この小屋にお世話になっただろうか。特に、停年退職してからのこの10年程は、殆ど毎年積雪期の芦火荘にやってきているが、何時きても心が落ち着く静かで快適な山小屋だ。

2月11日（金）：終日曇りときどき小雪。

4時起床 - 5:40/ 芦火荘 - 6:30-6:40/ 前坂峠 - 7:40/P897 - 8:30/P926 - 9:30/ 皆子山 - 11:30/ 前坂峠 - 14:00/ 百井 - 15:20/ 小出石。16:00/ 小出石発の京都バスで京都国際会館前へ。

4時起床後、ただちにストーブの煙突の撤去。小雪がぱらついていたが、視界は悪くなく十分行動出来そう。朝食後、小屋の清掃をして予定より早い5時40分に小屋を出発。尾越の部落を越えて杉林の中の暗い峠までは少し登りになっており、早朝にはしんどい。

前坂峠にて、寝袋やマットなどの不要な荷物を整理してシートをかけてデポをして、サ

ブザックで出発。昨日のトレースがあり、赤布テープの目印をつけてあるので歩きやすい。

早朝なのでゆっくりと歩き、昨日の最終点Ｐ８９７との分岐点にほぼ1時間で到着。雪は堅く締まっていて歩きやすい。Ｐ８９７との分岐点から真っ直ぐ南に２００ｍ程歩くと、西尾根の分岐点に至る。うっかりするとそのまま広い尾根を南に進んでしまいそうだが、西尾根主稜線はそこから南東に方向を変える。何処をみても同じような山毛欅とみずなら等の開けた広い林の景色に変化のない

気持ちの良い西尾根上部

皆子山頂上にて

尾根。これが北山の特徴だ。殆ど潜らない歩きやすい尾根を快適に進み、小さな小山を越えて次の小山に至ると尾根は二つに分かれる。南に延びる広い尾根を捨てて、今度は東の方に西尾根主稜線を少し歩くとＰ９２６のピークに着いた。

Ｐ８９７からもワカンが殆ど埋まらないクラストした雪で、Ｐ９２６まで50分ほどの行程。深雪や湿雪のラッセルが必要だったり、視界不良だと倍の時間はかかったであろう。Ｐ９２６で小休止をとった後、北北東に西尾根主稜線は延びていて、帰路の為に赤布テープを木に結びつけて歩く。10分程歩くと、西尾根は今度は東に方向を転回する。このあたりから、ようやく京都府最高峰の皆子山（９７１・５ｍ）が姿を見せた。皆子山の山頂付近は実に広々と翼を広げており、福井県の三重岳頂上周辺と似た感じだ。快適な山スキーが楽しめそうな広い雪斜面の西尾根が現れると、皆子山頂上はもうそこだ。気持ちのよい雪面を登り切ると、寺谷や皆子谷からの夏道の来る東尾根に出た。そこから約30ｍ程北へ進むと皆子山の頂上だった。たくさんの頂上標識のかかった皆子山頂にて記念写真を撮り、初めての西尾根からの登頂を祝した。

下山は、目印につけた赤布テープに導かれて、2時間で前坂峠に戻った。雪の状態が非常によかったので、前坂峠から往復約5時間の皆子山西尾根登山であった。

2時過ぎの小野谷口発の京都バスには間に合いそうにもないので、歩く距離は長いが大見から除雪した車道を百井経由小出石に降りる事にした。前坂峠から百井までは、延々と続く車道を歩くこと2時間半。百井の部落からは雪も完全に除雪された淡々としたアスファルト道を、小出石まで黙々と歩き、京都

バスの小出石停留所へ。

皆子山西尾根を今回初めて登ったが、今年のように1・5m以上の積雪で藪が完全に埋まっている時は、寺谷ルートや皆子谷ルートと比較して、西尾根は積雪期皆子山登山ルートとしてはベストと感じた。ただ積雪が、今回のようにクラストして締まっていなくて、深い雪や湿雪でラッセルがしんどいと、前坂峠からとても往復5時間では登れないであろう。又、西尾根は地形的に非常に複雑なので、視界が十分きかない時は、ルート・ファインディングに苦労するであろう。

いずれにせよ、永年の課題であった皆子山西尾根が積雪期にはこんなに素晴らしい尾根になることを発見し実に嬉しく、充実した満足出来る皆子山登山であった。今西錦司先生が御存命なら、この素晴らしい皆子山西尾根登山の報告を是非お伝えしたいところだ。

「ヘルプマーク」ごぞんじですか？

山城11回　西村　圭子

東京都で二〇一二年石原元知事がおやめになる直前都議会で決められたものです。難病患者、外見から分からない障害のある方に配布されます。

昨年京都でも取り入れてほしいと思い、一人から活動を始めました。次々と協力してくださる方があらわれ（山城十一回卒の方々も多数）今年四月より京都府で導入してくださいました。ゆくゆくは二万人から四万人が持たれると思います。

難病患者さんの大多数は痛みや手足のふるえ、いろいろな症状がありながら普通に生活し仕事をしてられます。

バスや電車に乗った時、平衡感覚が著しく弱っていますので、立っているのが苦痛なのです。もし「ヘルプマーク」をストラップでカバンに取りつけている方を見かけられたら、健康な方は席を譲ってあげてください。青森県でも導入決定。大阪・滋賀・和歌山・兵庫でも考えられています。二〇二〇年オリンピックまでに全国に広がることを夢見て活動しています。

ひもは11㎝、先端に大きな穴があり、手が不自由な人でも入れやすくはずれない。十年以上使用可能。

貴重な体験をしています

山城12回　田中　秀樹

（転居）

今年（２０１６年）の2月末に移転しました。神戸市東灘から姫路市砥堀というところです。私は現役時代姫路には調査で何回も来ていますが、砥堀は初めての所です。この辺は5年前にはまだ田畑に囲まれた田舎風の町だったようです。地形は市川を挟んで山が重なり、盆地気候、丁度京都の気候に似ています。冬の朝晩は非常に冷え（寒さに弱い私にはこたえました。）、神戸より3～4℃程度低くなりますが、昼間は神戸と同じ気温、又は、少し高くなります。

（誕生地）

私の生誕地は、京都市の西陣で、この地で大学卒業まで暮らしていました。実家の周り

は西陣織の織機の音が朝8時から夜7～8時まで鳴りやまない、今で言う騒音公害の所で生活していました。当時、自動車は少なく、我々子供らは学校から帰ると夜になるまで一日中道路で遊び更けていました。家の外も内も賑やかな所でした。

（卒業から就職）

大学を出て、東京の新宿区にある本社に付随した研究所に勤めました。会社の寄宿舎は世田谷にあり、新宿や世田谷は深夜まで人や車の動きが絶えない所でした。その会社に約2年間勤めましたが、縁あって兵庫県立工業奨励館（現：兵庫工業技術センター）に勤務することになりました。さらに、兵庫県公害研究所（現：環境技術センター）や兵庫県立衛生研究所に転勤しました。その間に、神戸市東灘区、須磨区、西区、東灘区と転々と移転しました。さらに、ＪＩＣＡの技術専門家として多くの外国の町で暮らしました。どの土地も人や車が溢れ、賑やかな街の中で何不自由なく生活していました。

（気分一新）

各自子供も独立して、我々も年を取り、静かな田舎生活も良かろうと色々移転先を探していましたが、知人の紹介で姫路市砥堀に移転することを決めました。砥堀は姫路市ですが、市内から北の方向にあり、まだ畑が点在しています。砥堀地区は6区に分かれております。私は1区に属し、3年前の世帯数は約50戸で、人口も１００人程度でしたが、今年の3月には世帯数２５０戸、人口は６００人を超えたようです。3月に公民館で開かれた1区内の総会に出席しましたが、約１１０名を超える出席者があり、さらに、総会の終わりにはすしの折詰、おつまみに缶ビールまで出たのには大変驚きました。

（町の開発）

2年後には住宅は５００戸以上、住民は１０００人を超えるとのことです。周りの田畑は、不動産会社が買い占め、住宅の建設中のものがかなり有ります。さすがに、高層住宅はなく、２００～２５０㎡の敷地面積に2階建ての家屋が主流に建てられています。これらの住宅は、すべて都会から移転する人が購入しています。今までは、人に聞いたり、本で読んだりして理解していましたが、このようにして、村から町へ、町から都市へ移行する過程を実際に住んでみて体感できることは貴重であると思っています。

（町内の描写）

大変興味あるのが、旧地主の家屋と新居住者の家屋が一本の道ではっきりと分かれています。旧地主の家屋は山手にあり、非常に大きく敷地面積が５００～６５０㎡ほどあります。ほとんどの家の庭の駐車場には農業用軽トラックの横に、ベンツ、ワーゲン、アウディなどの高級外車が並んで置いてあり、何となく違和感があります。しかし、田畑を売れば、高級外車を買うに十分余裕があるようです。

一方、新居住者の住宅の庭には、ほとんど軽自動車、または、８００～１５００cc程度の普通乗用車です。この理由として、姫路駅前や幹線道路以外は、ほとんどの道路が狭いためです。特に、私の住んでいる地域の道路は、以前の農道を少し広げた程度で非常に狭く、対面交通が無理なところが多く、対向車が通過するのを待って通行している状況です。従って、都会で運転していた人には、大型車の運転は危険で、軽自動車が主流になるのでしょう。

（日常の様子）

当家の周りには、生協、大型ホームセンター、殆どのコンビニ、多種多様な飲食店、衣類の量販店など日常に必要な買い物は徒歩10分以内で可能です。私は運転免許証を1年前に返上していますが、日常は徒歩か自転車で十分間に合います。しかし、唯一不便なもの

はバス、JRなどの交通機関です。どちらも、7～9時台までは1時間に3本程度ありますが、午前11～午後2時台には1時間に1本か2本しかなく、姫路駅（砥堀から3駅：10分弱）など少し遠くへ行くには、車の必要性を実感するときがあります。

当地の人々は、70、80歳以上の男女ともに運転しています。また、少々疑問ですが、新居住者は近くの店にも車で出かけています。都会では考えられませんが、土地が広いため、1軒に軽自動車を3台も所有している家もあります。東京や大阪などの大都会ではカー・シェアリング（car sharing）の時代に入っており、また、地球温暖化対策のために自動車メーカー各社は化石燃料から電気、水素燃料等切り替えに積極的な研究を行っている現状ですが。

（土地の人々の性格）

都会と比べて、旧来から居住している人々の性格は非常に親切です。全然知らないお年寄りや子供たちは道で会っても挨拶されるので、兎も角、私も会えば知る、知らないに関わらず、挨拶しています。加えて、子供からお年寄りまで多くの人が住んでいるのですが、家外では人はたまに見かける程度で、控えめな人が多く、家屋内にいるようです。しかし、近い将来、旧居住者より新居住者の人口が圧倒的に多くなることは確実であり、その折、どのような対人関係になるのか興味を持っています。やはり、都会化すれば、隣人に無関係な状況に変わって行くのでしょうか。

都会生活しか知らない私の初めての体験ですが、まだまだ、土地の風習が理解できていませんので、戸惑いがあると思います。地区に神社があり、この神社を中心に、色々な行事があるそうです。居住歴の浅い新参者である私の少々の経験談です。

終わり良ければ全て良し

山城15回卒　伊藤　浩介

山城高校の体育の授業で忘れられないことが二つある。一つは、今もトラウマのようになっていて、もう一つは励みになっている。

その一

冬の授業はサッカーとラグビーが多かった。或る日の授業はサッカー。ポジションを決めていたかどうか定かでない。私のサイドが攻め込んでゴール前の攻防から混戦から少し離れた位置にいた私の前にボールが転がって来た。ゴール前約15メートル。ゴール右はガラ空き、敵は誰もいない。「シュートや！」と声が聞こえた。サイドステップで当てればゴールできる好位置だった。私は釜本張りに豪快なシュートを決めようとインステップで右足を大きく振り上げた。ヘッドアップで足は空を切った。「アーッ」とため息が聞こえた。

時はステップして39歳で私は草ラグビーチームに入った。ラグビー実戦は山城高校の体育での経験だけである。大学OBとか社会人OBのしっかりした母体を持たない草ラグビーチームは構造的に慢性的人手不足である。加わったチームは試合の度にメンバー集めに苦労をする弱小チームで、私でも即レギュラーのいい加減さだった。或る日の試合でわがチームは敵陣へ攻め込み、ゴール前で私はフリーになった。ゴールまで約15メートル。誰もいない。パスが回って来た。もうトライのイメージができていた。真直ぐ走り込むだけだ。ダイブするか片手でタッチダウンするか考えていてボールから目が離れ、パスされたボールをつかみ損ねた。痛恨のノッコン（前に落とす）。高校時代のサッカー空振りシーンとラグビーのノッコンシーンはダブり、今も夢に見る。

元ジャパン・ヘッドコーチ
エディージョーンズ氏と

その二

体育の辻先生（私達はツンサンとニックネームで呼んでいた）には皆が少し恐れ、微妙な尊敬の気持ち（私はそうだった）を持っていた。日本体育大学卒業、私達の前で大車輪を見せてくれるほど器械体操が得意な先生だった。当時のツンサンの年齢は想像するに30歳台半ばではなかったか。授業で課題になる難しい種目でもツンサンは簡単そうに実演してしまうので、私達にひょっとして自分たちにもできるかも、と思わせてしまうのだった。三年時で鉄棒素人には難易度の高い「蹴上り」の授業があった。まずツンサンが模範演技を見せ、腕の引き具合などポイントを教えてくれ、何週かの練習の後（私は何度教えられても出来なかった）、テストがあった。体の反動とタイミング良く腕を引くことで上がれるのだが、実際はそう簡単ではない。多分、蹴上りをマスター出来た人は多くなかったのだと思う。テスト前に「とにかく蹴上りを試み、上手く出来なくても鉄棒に上がれば合格や」と訓示があった。これで気持ちが楽になったが練習で全く出来る気配のなかった私は順番が来て試みたが当然失敗、ダラーンとぶら下がり状態になり、訓示に従って懸垂で鉄棒によじ登った。ツンサンの「合格！」が聞こえた。蹴上りはスマートに鉄棒にあがる一つの方法だが懸垂でよじ登るのも不格好だが結果は同じだ。ツンサンにもらった「よじ登り合格」の認証は終わり良ければ全て良し、と理解した。

再び時はステップして、53歳で私は初めてフルマラソンを走った。もちろん当時としてはそれなりの準備をして臨んだのだが、21キロを過ぎての後半はスタミナが切れ、30キロ過ぎからは参加したことを悔いるほどの辛さだった。それでも疲労困憊に何か不思議な魅力があり翌年も走った。マラソンは誰かと競うというより過去の自分自身を乗り越えたいという気持ちがレースへのモチーフになる。本格的な運動経験のない私でも参加を繰り返して行くうちに、徐々にレース展開を憶え、練習を重ねることでスタミナ、足の筋肉が付きゴールタイムも縮まった。途中3年の中断があったが、61歳で再開、前にもまして練習に力が入った。65歳で走った２０１１年東京マラソンではメキシコ五輪銀メダルの君原健二さんを40キロ過ぎで追い抜いてしまった。君原さんはトップランナーとしてのレースは引退した後も市民ランナーとして走り続けている。その頃でもタイムは3時間半ぱの実力だった。「腐っても鯛」である。よもや自分が君原さんに勝つなんて思いもしなかった。この結果は随分励みになっている。（写真東京マラソンのゴール）

私より4歳年長の君原さんはまだマラソンを走り続けている。私の次の目標は君原さん

の年齢を超えてマラソンを走ることだ。それは何歳になるのか分からない。もし君原さんのマラソンフィニッシュ年齢を超えることができたら、ツンサンの「合格！」がもう一度貰えるかもしれない。終わり良ければ全て良し、と。

「アトランタからの手紙」

山城15回卒　鈴木修一郎

アメリカに来てはや40年が経ちました。最近やっと文化共々アメリカが日本同様、自然に考え理解できるようになりました。今、私達夫婦が住んでいるのは、ジョージア州アトランタの北に車で45分のアルファレッタ(Alpharetta)という郊外の街です。ジョージア州は樹々が多く森に囲まれた街です。鹿や色とりどりの鳥や初夏には各家庭の庭に蛍が飛び交います。

1976年1月、ヨーロッパ6ヶ月の旅を終えニューヨークに到着しました。ヨーロッパ6ヶ月一人旅は、今から思うとよくあんなことができたなとつくづく思います。それが出来たのも怖さ知らずの好奇心と若さだと思います。あの時の体験は今の私にとってかけがえのない貴重な体験でした。私が京都で生まれた時、13歳と14歳年の離れた姉が2人おり、大変甘やかされて育ちました。自然に人を頼り人のせいにする性格になっていきました。ヨーロッパとアメリカでの生活で、そんな環境は一変し、周りに頼る人が居なくなり、一人で道を切り開く状態に置かれました。結果的には今の自分がいる状態で最善だったと確信しています。

アメリカは言語、文化、習慣も日本と異なります。苦労とは思っていませんでしたが、英語の習得に苦労しました。最初は日本語で考えて英語に切り替えていましたが、数年経って日本語で考えず直接英語で考え話している自分に驚いたことです。

アメリカでは日本と同じ常識が存在しません。全く常識が無いという意味ではありません。日本は単一民族で皆共通した常識を持っています。アメリカは人種のルツボといわれるくらい色んな人種、文化の違う人々が暮らす社会です。人によってものの尺度に違いがあり、困惑しますが、発想に限界がなくある意味で自由です。今はそう思っています。

英語が自由に話せることは、私にとってアメリカに限らず海外に行った時、40年前ヨーロッパを旅行した時に比べコミュニケーションのレベルが上がり、色んな人との出会い、中身の濃い体験に驚いています。

我々夫婦の共通の趣味はスキューバ・ダイビングです。昨10月にはベネズエラの近く、オランダ領キュラソー(Curaçao)で潜ってきました。水中の案内とインストラクターを兼ねたのが、ミュンヘン生まれで18才の女性、ベッキーでした。彼女は生粋のドイツ人独特の硬さがなく、人なつっこくて、自分で映画などで学んだ英語にはドイツなまりもなくスムーズで、おかしなヘヤースタイルをした英語をあやつる日本人のジジイに興味（男性としてでなく）を持たれ、色んな話をし、

彼女のボーイフレンドの話にも及びました。何回か一緒に潜って貰い、いつも我々以外に10人くらい一緒に潜るのですが、何故かいつも我々夫婦の専属のガイドの様に付きっ切りでいてくれました。

私のファミリーの写真（前頁）を添付します。

私の一番の宝は日本の子供のころからのかけがえのない友人達です。又皆様にお会いできるのを楽しみにしています。お身体を大切に、ご自愛ください。

「裁判外紛争解決手続き」（ＡＤＲ）の一端に関与して

山城15回　宮本　照夫

一　はじめに

私は元京都府職員で、そこで33年間勤務し、平成15年3月末で退職しました。その33年間のうち約17年間、京都府地方労働委員会事務局（現在は、「地方」という名称はなくなっています。）勤務でした。労働委員会の仕事は、いわば裁判によらない紛争解決手続き（ＡＤＲ）の一種です。その後、京都地方・簡易裁判所の民事調停委員の委嘱を受けたのは、平成16年4月1日で、平成26年3月31日までの10年間を経験しました。また、その間、平成22年1月1日から司法委員（たるべき者）として委嘱を受けて平成28年12月31日までの7年間を経験しました。後で説明しますが、民事調停委員も司法委員も裁判によらない紛争解決手続き（ＡＤＲ）の一翼を担う役割を持つものであり、そう考えると、私は現在まで、労働委員会約17年、民事調停委員10年、司法委員7年の計34年間、ＡＤＲに関与してきたと言えます。

二　ＡＤＲとは

（1）ＡＤＲ（Alternative Dispute Resolution）とは、裁判によらない紛争解決手段のことで、行政機関や民間機関による和解、あっせん、仲裁及び民事調停、家事調停、訴訟上の和解をいいます。（ＡＤＲポータルサイトより）

（2）裁判外紛争解決手続きの利用促進に関する法律（平成19年4月1日施行）（略称ＡＤＲ法といいます）は比較的新しい法律です。以下のＡＤＲの機関の基本法というべき法律です。ＡＤＲの機関（主たるもの）には次のようなものがあります。

司法機関
- 簡易裁判所・・・・・・・・民事調停
- 家庭裁判所・・・・・・・・家事調停
- 地方裁判所・・・・・・・・労働審判

行政機関
- 原子力損害賠償紛争解決センター
- 公害等調整委員会
- 国民生活センター
- 消費生活センター
- 労働委員会等

民間機関
- 日本弁護士連合会交通事故相談センター
- 交通事故紛争処理センター
- 国際商事仲裁協会等

三　私が関与したＡＤＲ

（1）京都府地方労働委員会事務局・・・概ね17年間

①不当労働行為審査・・・・・労働組合法

②あっせん、調停及び仲裁・・・・・労働関係調整法

以上は、集団的労使紛争であります。

③個別労働関係紛争のあっせん・・・個別労